

DEBUT 首長

北海道東神楽町長 山本 進氏



やまもと・すすむ 1966年北海道弟子屈町生まれ。89年北海道大学法学部卒業後、東神楽町役場へ。企画振興課都市計画係長、まちづくり推進課主幹などを経て、2月の町長選で初当選。趣味は料理、落語など。好きな言葉は「Be ambitious」。45歳。

大学と街づくりで包括協定 地域ビジネスの芽を育てる

東神楽町 旭川市に隣接し、人口約9700人。米や野菜を中心に農業が盛ん。大規模宅地開発で年々人口が増加し、「花のまち」としても知られる。

——前町長と議会の対立が出馬のきっかけだったが、その後修復されたのか。

副町長がやめるなどこのままでは行政として何も進められないという危機感があった。私は総務・企画に携わり町長を支える立場だったが、町を変えなくてはとの思いから出馬に踏み切った。要はコミュニケーション不足。真摯に向き合うことで、議会との関係は通常化している。

——マニフェストでは60項目を掲げた。検証を含め、どのような手順で進める。

まず、知のネットワークづくりとして旭川大学と街づくりなどで連携するため、包括協定を結んだ。役所内にこもっていいアイデアは出てこない。外部からの知恵を取り入れた行政を進める。町内には中学校までしかなく、生涯学習の点からも効果を期待している。10月

から中学生までの医療費無料化を始めるなど、短い期間で実現したものもある。町内に立地する旭川空港を拠点に地域産業や観光の懸け橋となる「空の駅」創設など時間がかかる。マニフェストで掲げた内容を実現するために総合計画に順次、反映させる形で進めたい。4年後にどれだけ進んだか検証することになると思うが、数値合わせそのものには意味がないと考えている。

——人口が増えて人口に占める子供の比率も北海道内一だが、人を呼び込む秘訣は。

「花のまち」づくりで全国的に有名になったが、町民が町全体を小ざれいにしようという意識が強く、4～10月までの間の年4回、ゴミ拾いや草刈りなど「一斉清掃」を実施している。「花のまちづくり条例」を制定し、生活環境をより良くするための新たな方策を考えたい。旭川市のベッドタウンとして人口1万人に迫っているが、市と違うのは子育て政策の充実だ。待機児童問題もある中で10月から学童保育、子育て支援、高齢者サロンが一体となった施設が

オープンした。町全体で子供を育てようという考えだ。一連の施策が評価されている。

——中核市に隣接する自治体としての生き残り策は。

工業団地を整備したことで旭川市から家具産業などが移ってきた。ただ、今後新たな企業誘致が出来るかという難しい。地域としてどう食べていくのか。旭川空港が立地している利点を生かすには、空の駅をはじめ、はなから森林公園など観光拠点をさらに整備する必要がある。もう一つは地域力の強化だ。2013年度には町民も参加し、地域別の街づくり計画を策定する。町ではもともと公民館活動が盛んで、地域ごとに宝探しをしよう。そうした中で、徳島県上勝町の『葉っぱビジネス』のようなコミュニティビジネスが生まれるといい。町でも味噌、スプラウト（かいわれ大根）など土壌はある。

(聞き手は

旭川支局長 川井 幸司郎)